

第廿五回文科學術談話會

記事

大正二年二月一日午後一時より講堂に於て例會を開く。

講演順序

- 一、各國殖民地視察談 文學博士 幣原 坦
- 幣原先生は嘗て當校の教官にましませし由校長中川先生よりの御紹介あり。
- 前記の演題による御講話約二時間に亘りて面白く拜聴す。御講話の内容は次號の會誌に掲載の筈。

二、朝鮮の話

文一ノ二 安永 みち

朝鮮風俗に關する標本類(櫻蔭會より本校に寄贈せられしもの)を陳列して參考に供す

なほ當日の豫定として、文科三年本田よる氏

の容儀服裝の變遷に關する説話ある筈なりしも時間の都合により次回に繰り延ばす事とせり。

會員移動

- 一、澤ため子氏
- 熊本縣限府町高ノ瀬佐藤方に轉居せらる
- 一、高橋まり子氏(舊姓白川)
- 退會せらる

第四回會計報告

收入 金七拾參圓貳拾參錢

内譯

- 四拾壹圓四拾壹錢五厘 前回よりの繰越金
- 壹圓 客員よりの寄附金
- 九圓八拾錢 贊助員會費
- 貳拾壹圓四錢五厘 會員の會費
- 支出 金四拾九圓四拾錢

内譯

- 四拾參圓木拾五錢 會誌第三號印刷代
- 壹圓五拾錢 謝禮
- 四圓貳拾五錢 會誌送料及例會雜費
- 差引殘高金貳拾參圓八拾六錢
- ◎會費領收
- 四十五年度分

湯田 るい 林 玉子 林 文子

交詢

母校たより

◎大正第一の新年は希望の光を包んで黙々の中に歩み來り候。諒闇中の悲しさは祝賀の式も御遠慮致し候事なれば一月八日午前八時を以て新しき世に入りたる職員生徒は始めて一堂に會し校長より大正人としての覺悟につき切實なる御訓話を承り申候。あゝ吾人は奮闘努力大正の世

- 今泉 うた 大平ふじへ
- 高橋 まり 澤 ため 丸山 モト
- 寺山 まつ 折笠 らい 橋本きをじゆ
- 大正二年度分
- 林 玉子 林 文子 大平ふじへ
- 丸山 モト 河崎 なつ 折笠 らい
- 竹田 倭子 小林きしの 竹尾 恵子
- 千葉 安良 目良 かね

をして充實せるものたらしむべき大責任を有し居るにて候。

◎二月一日講堂に於て文科學術講話會開催幣原博士を聘して氏の親しく視察し給ひし世界各地の女子の風俗教育等につき講演を承り申候。聴衆堂に溢れし盛況は以てその内容を察し給ふに難からずと存せられ候。

○二月四日午後三時より講堂に於て日米交換教授の爲に舊臘來朝せられしメービー博士の講演

有之候。博士はアウトトルック社副編輯者。文學者として令名ある方の由、小さき日米國旗を胸にかざして新渡戸博士と共に臨場せられ候。

明快なる辯舌もて現時に於ける米國の若き婦人につきて述べられ候。小此木先生の流るゝが如き御通譯、先生を煩はさでは半啞なるを悲しむ同時に我が國語の普及せむことを思ひ候。

○二月十一日常ならば遠き建國の昔を懐ひ帝國の將來を祝して大講堂は夜會に花やぎ候ものを此の夜空は例年になく鈍色にかき曇りて日影も見ゆず、咽ぶが如き木枯の風いと物凄く吹きすさみ候ひしかば人は多く暖爐を抱いて、思ひのやる方なきを嘆じ申候。

○今年の寒さは中々に烈しく數日前までは猶去歲の名残の白雪さへ消えがてに庭の隅などに見出さるゝ位にて候ひし程に一時は流行性寒冒猛威を奮つて各室を呪ひ來りし有様に候ひしがきのふけふ漸く凍りつきし土も柔かに濕り候へば

殆ど退却致し人々の面も春めき申候。校園の梅も今日珍らしく一輪笑み初め申候。

○四年生も既に敎生第三期に足をふみ入れし昨今漸く敎養の趣味を感得致し候。學科生の頃は人事とのみ思ひし奉職地の聲も今は自ら身の上と成りしかと思へば夢のやうに候。この櫻の綻ぶ頃はなご想へばそれ迄に是非眼を通したき書物、先生に伺ひたき事柄、觀て置きたき場所、筆記して置きたき物の數々限りもなう營の根の長き春の日もなかくに靜心なき此の頃の生活御經驗遊ばされし姉君達には御思ひ出の深きことにて候ふべし。

○寮舎の狹隘なる爲に來學年度もいづれ一組は外舎に出づべき運命を有し居り候エスキモーは冷たき水の家を花の巴里よりも慕ひ候ふとがやまして清きお茶の水の月の捨て難きははいはずもがなにて候ふ今度は三年か四年かなど、風説の翼は自由に飛び廻り居り候。

瓦建築に連るに同じ赤色を以て塗られ開かるべき將來を近日に待ちて新らしき木の香を放ち居り候。東校舎階上の廊に立ちてこの中庭こそテニスには相應はしけれとほゝ笑むは選手の君達に候。かくして校舎も日に完成に近づき申候。終りに臨んで皆様の御健康に益御活動あらせられむ事を祈り上げ候(二月二十日)

◎熊本より

堀尾とめ

母を失ひて三日苔の衣の露いとしげき一月二十三日といふに御端書拜見致し候。文科會誌上に何かものせよとの仰せ、誠に忝けなくは存じ候へども。たらちねの愛の乳汁を失ひし身はたゞたゞ思ひまごふ事のみ澤にてわれかの心地にて明し暮せるたゞすまい、とてもまごまりたる思想も御座なく候へばたゞ返信にのみとゞめ申べく候。

母は私の卒業をのみ待ちて水仕の業さへ自ら勤め居たるものにて御座候。秋の雁四度歸り春

の櫻五度咲きて、私は人後に立ちつゝも故郷に錦を飾る身と相成り申候。しかも家庭の人として學校に勤むるてふ同級生中の最大幸福者の一人に數まへらるゝてふおほけなき幸を受くる身と相成り申候。親子はらからまごゝして樂しき憂き敎への園の出來事を語る身と相成り申候。

然れども、此樂みはたゞ束の間の夢にて候ひき。畏くも世は諒闇の鈍色にとざされたれど、少なき我が家自身としては一家揃ひて先づめでたき新年よと心ばかり汲みかはせし屠蘇の薫りさへ醒めざる一月九日といふに母は病の床に打臥し申候。かりそめとのみ思ひしいたづきは頓に重り行き、地方に於ける名醫の調劑も更にその効なく、水輪かげびえて寒禽の聲さびしき一夜母は溘焉として逝き候。時之大正二年一月二十日にて候ひき。母が子供を抱けるは美術品中の最大美術品と聞き候。私の家には永久に此尊き美術品を見得べからず相成り申候。あゝ。古の業平の中將ならねど私も亦千代もと祈りたる人の子にて候ひき。かく早く別れむとは神ならぬ身